母親によって行われてきた家庭での言葉と文化の教育

國津　日本語の乱れは、日本文化の継承が断絶したからとも言われていますが、なぜ、こんな現状になったのでしょうか。

中村　気候や地理的条件また宗教によって各国の生活様式は異なりますが、その国の文化は生活の中に息づいています。かっての日本では、母親が伝統的な生活や正しい言葉遣いを、家庭の中で子どもたちに教えていました。特に日本の生活文化は女性によって継承されてきました。つまり、花嫁修業の習い事として、料理・お茶・お花・裁縫・しつけなどが子供の時から厳しく訓練されていました。

しかし、女性の社会進出や家庭構造の変化で、その継承が消えかかっています。言葉遣いはもちろんですが、日本文化の素晴らしさを学ぶ機会を、どうすれば取り戻せるかは大きな国民的課題です。

中川　日本語で変化を感じることは、家庭の中で敬語が使われなくなったこと。先ほど、韓国では儒教教育が低下したと言いましたが、やはり韓国人の精神の根本には儒教が大きく存在しています。親や目上の人たちを敬う儒教の価値観を体得しないと、韓国語の習得にはならないほどです。

和田　中国も自国の文化に誇りを持ち、大切にしています。学生も労働者も、足しげく図書館や書店に通い、漢詩などの古い文献から多くを学んでいます。ここ数年、ビジネスツールの一つとして日本語を習う中国人が増えていますが、言葉を理解しても、日本人や日本文化を理解しているとは限りません。文化の違いが原因で、仕事で壁にぶつかることも多いようなので、言葉と文化は一緒に学ぶべきですね。

岩元　皆さんのお話を聞いていると、各国共通して言えるのは、文化と言葉は表裏一体、両輪となって発展しているということ。言葉は文化の結晶なのだとつくづく感じます。ところで、日本では、日本語教育＝国語では、話し方の教育はなされてきませんでした。尚絅大学で、今年度から正規の授業として「話し方論」「アナウンス実践論」が取り入れられたことは、学生たちを社会へ送り出す大学としては意味のあることです。

中村 幸士郎
昭和42年、神戸大学文学専攻科英米文学修了。文部省在外研究員としてケンブリッジ大学、文科省短期在外研究員としてバーミンガム大学大学院に留学。平成18年、山口大学を退官後、4月より尚絅大学文化言語学部文化言語学科長として着任。

岩元 克雄
昭和43年、アナウンサーとして熊本放送入社。RKK学苑社長などを経て、平成18年4月より尚絅大学文化言語学部文化言語学科「話し方論」「アナウンス実践論」の非常勤講師となる。今年の夏、「語道のこころ」「お遍路道中記」を出版。

海外の生活を体験し日本語の素晴らしさを再発見

國津　尚絅大学の文化言語学部としては、今後どのような取り組みが必要でしょうか。

中川　海外留学などによって、日本文化と日本語を外から見てみると、自国の文化と言語を見直すきっかけになります。例えば、韓国と日本は、距離的には近い国ですが、一歩踏み込んでみると相違点がたくさんあります。そのような体験ができるのも、自由に時間が使える大学時代ならではだと思います。

和田　中国の歴史や文化を学びながら、今の中国を知ることも必要です。幸いなことに、日本と中国の間には、漢字という共通の文字、書道などの共通の文化があります。それらを通して交流をはかる「書道コース」があるのは、尚絅大学の素晴らしい特徴のひとつです。

中村　英語コミュニケーションコースで二年次に行うアメリカ留学を、本学の全ての学生に広げると共に、今後は、東南アジアやヨーロッパなどの国々にも、短期研修として広げてみてはどうでしょうか。海外旅行に行く人は多くても、ホームステイなどを通してその国の家庭生活を体験できる機会はごくわずかです。大学で教わる「知識」を、生活に生かせる「知恵」として身に付けるためにも、新しい研修の場を設けることも検討したいですね。

岩元　尚絅学園は中学から大学まで一貫した女子教育の場。茶道や華道など、日本文化を授業の中に取り入れているのも、女子校だからこそできるメリットです。そのようなカリキュラムによって、品格ある日本語と日本文化を学んで欲しいですね。

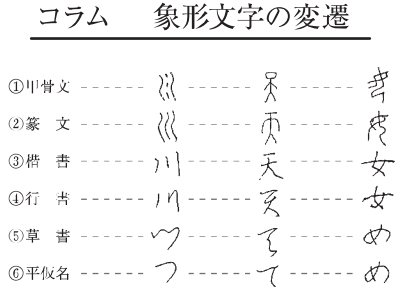
國津　尚絅学園には多彩な先生方がおられます。一貫教育で日本文化を教えることができるのは、本学園の強みでもあります。尚絅で学んだ女性が外国に行く時、日本文化の知識があり、品格のあることばを話すことができるのが尚絅の教育ということになります。

本日は誠にありがとうございました。

和田 英穂
平成9年北京大学歴史学部中国史専攻卒業。平成16年3月愛知大学大学院中国研究科博士後期課程修了。博士（中国研究）。その間、平成12年2月より1年間、台湾師範大学歴史研究所に交換留学。平成18年4月より尚絅大学文化言語学部文化言語学科講師として着任。

中川 明夫
昭和59年、中央大学文学部国文学科卒業。平成6年よりソウル大学校大学院師範大学国語教育科修了（韓国語教育）。平成18年までソウル保健大学観光日本語通訳科専任講師を務めた後、平成18年4月より尚絅大学文化言語学部文化言語学科助教授として着任。

コラム　象形文字の変遷



川
1の甲骨文の両脇の2本の線が岸を、中の点が水を表します。
両岸の間を水が流れている様子です。
2の篆文では、水の点が1本の線で表現されています。
3の楷書から段々続け書きされることで平仮名の「つ」になります。

天
1の甲骨文は人が手や足を大きく開いて立った姿です。
特に頭の部分が強調されています。
2の篆文では、頭の形が1本の線となり、省略形となっています。
4の行書から5の草書の間で崩す上でのかなりの変化が見られます。

女
1の甲骨文は女の人が両手を前に重ねて跪いた形です。
2の篆文は書き易くするために左に90°回転させた形が
3の楷書の形につながっていきます。それから続け書き
され平仮名の「め」になります。

コーディネーター
國津 英愛
尚絅学園常務理事